



SARSの今後と大学病院

感染制御部 朝野和典

TITLE

一世界保健機関（WHO）のブルントラント事務局長は5日、新型肺炎（重症急性呼吸器症候群＝SARS）の「感染地域」として最後まで残されていた台湾を感染地域の指定から外すと発表した。

（7月5日、共同通信）

台湾におけるSARSの終息宣言が7月5日に出され、世界からSARSの脅威が消えた。日本では一例の症例も発症せずにより乗り切ることができた。おそらく、単に幸運だっただけであろうが。

一方で、この冬SARSが再流行する可能性が高いと言われている。理由はインフルエンザと同じように、コロナウイルスは冬になれば再度活性化され、感染症が流行すると予測されるからである。インフルエンザは冬場に流行り、春には発症しなくなる。すると、SARSも単に高温、多湿になり自然にいなくなっただけかもしれない。夏の間、人間か動物のキャリアの体内で眠っているのかもしれない。

それを受けてWHOは今年のインフルエンザは特別の対策が必要であると言っている。その一方で、SARSはたとえ再発しても制圧可能だろうと希望的な観測を発表している。もちろんそうなってほしいし、再流行が起こっても今年以上に有効な隔離策が迅速にとられることを期待したい。だが、ほんとうにそううまく行くのだろうか、と不安がよぎる。

一SARSで変わった世界の次のインフルエンザシーズンへの対策

SARSによって引き起こされた世界的な公衆衛生上の緊急事態が終わりに近づくにつれ、次のインフルエンザシーズン中に起きるとされる問題点へと注目が集まりつつある。

-----可能であるならば、特に施設内で介護を受けている高齢者や、慢性の心血管系疾患の患者を含む、そのほかの疾病の感染リスクがある人々にも、ワクチン接種が行われるべきである。

（WHOによる重症急性呼吸器症候群（SARS）多国同時集団発生の報告7月3日、更新第94報）

一もし（この冬）SARSが戻ってきたらどうなるか？

WHOには、今年後半にSARSが再び表舞台に出てくるとしても、初回の世界的緊急事態で経験したよりは、その影響は軽くなると信じるに足る理由がある。第1に、世界的レベルの公衆衛生システムに、高いレベルの警戒の段階へ迅速に移行する能力があることが示された。第2に、1世紀以上も古い感染制御手法ではあるが、

その手法により、集団発生を完全に終息させる力があることが示された-----最後に、おそらくこれが最も重要であるが、国際的に（感染が）拡大する可能性があるあらゆる疾病の症例を、即座にすべて発表する重要性がSARSによって明らかにされた。いかなる国も症例を隠すことを選ぶとは考えにくい。このような理由からWHOは、例えSARSが再び流行に転じたとしても、驚くほど大きな脅威とはなり得ないと楽観している。

WHOによる重症急性呼吸器症候群（SARS）多国同時集団発生の報告（6月26日、更新第89報）

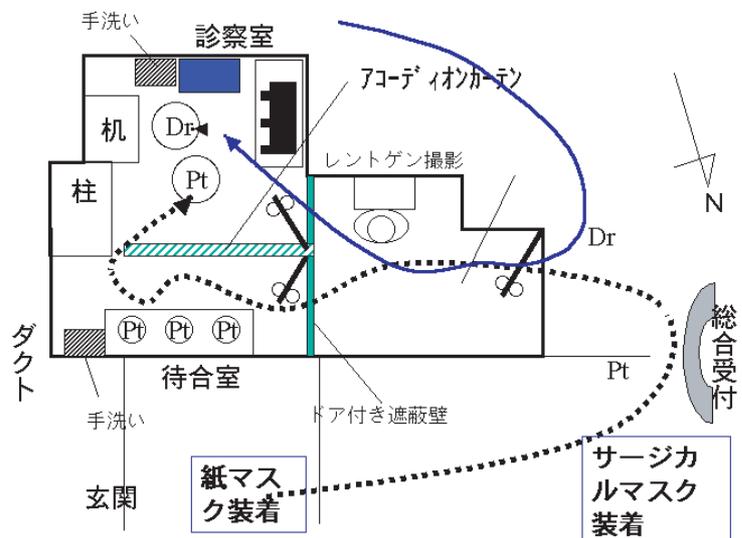
わが国の備えをみてもみると、厚生労働大臣が今年のインフルエンザに対する対策を厳重にするように述べている。

一坂口力厚生労働相は6月17日の閣議後の記者会見で、新型肺炎（SARS）対策の一環としてインフルエンザワクチンの接種促進など今冬のインフルエンザ対策を強化する方針を明らかにした。同省は高齢者を中心にインフルエンザワクチン接種を推進するほか、検査キットや治療薬を十分に確保するため、夏から準備を進める。（6月27日、共同通信）

さて、このような状況のなかで、われわれ大阪大学附属病院において次にとるべきアクションは何か、考えてみた。ひとつは外来診療のあり方であり、もうひとつはワクチン接種の推進である。

外来に感染制御外来が整備された（図）。外来における感染制御のあり方はSARSの出現によって根本的に見直さなければならなくなった。その基本的な考え方がトリアージ（優先診療）である。

（図）感染制御外来
患者、スタッフ導線と室内装備



病院玄関に「発熱、咳嗽、喀痰、発疹のある患者様は備え付けの紙マスクを着用の上、総合案内をお訪ねください」というポスターを掲示し、総合案内にトリアージナースあるいはドクターを配置する。SARS、インフルエンザなどの呼吸器ウイルス疾患や結核、麻疹、水痘、風疹などの感染性の疾患を疑う患者様をただちに他の患者様から隔離して感染症外来で診療する。この手順について、冬場に向かって確立しておかなければならない。そのためには、トリアージを担当する医師、看護師の確保が必要になってくる。

インフルエンザワクチン接種の推進は、病院内のみならず地域の医師会、保健所とも協力して行う方針である。特に吹田市医師会、吹田保健所とのコンタクトを維持し、行政も巻き込んだキャンペーン活動に参加したいと考えている。

今年の冬のインフルエンザシーズンに向けて、大阪大学が地域医療のなかで担うべき、あるいは担うことのできるSARS感染診療はどのようなものになるか、環境の整備とともに議論を深めておかなければならない。